

2022年度（令和4年度）学校経営計画

2022年（令和4年）4月1日
学校名 福山市立広瀬学園小・中学校

I 学校の状況

(1) 学級数 小：9学級（通常学級6，特別支援学級3）中：5学級（通常学級3，特別支援学級2）

(2) 児童・生徒数

学年	通常学級	特支（知的）	特支（自・情）	特支（肢体）	計
1年	1	2			3
2年	4				4
3年	4	1	2		7
4年	4	1	1	1	7
5年	9				9
6年	6	2	1		9
計				1	39

学年	通常学級	特支（知的）	特支（自・情）	計
1年	7	1	2	10
2年	9	2	3	14
3年	9	0	0	9
計	25	3	5	33

(3) 教職員数 (小) 16名：校長1（兼務），教頭1，教諭8，介助員1，看護介助員1
養護教諭1，主事（兼務）1，技術員（給食）2
(中) 21名：校長1，教頭1，事務長（兼務）1，教諭9，非常勤講師2
介助員1，学校支援員1，図書館補助員1，校務補助員1
養護教諭（兼務）1，事務（兼務）1，SC1

○生徒の現状

小学校時に不登校傾向や特別支援学級在籍していた生徒や家庭事情などにより児童養護施設から通学する生徒が多く在籍している。学力差も大きくきめ細かい指導が必要である。また、自己肯定感が低く表現力やコミュニケーションに課題がある生徒が多い。

○課題

- ① 基礎学力の定着（「読み・書き・計算」を中心とした学力の定着，思考力・表現力の向上）
- ② 生徒の自己肯定感の育成（自信・学習意欲の向上）
- ③ 心身の健康に関心を持たせ，体力向上を図る。

II 教育目標

○国 (学習指導要領の基本的な考え方)

新学習指導要領の着実な実施と今後のスケジュール

〔スケジュール〕

2022 (令和4) 年度 高等学校本格実施

○広島県版「学びの变革」アクションプラン全県実施

・育成すべき人材像 広島県で学んだことに誇りを持ち、胸を張って「広島」、「日本」を語り、高い志のもと、世界の人々と協働して新たな価値 (イノベーション) を生み出すことができる人材

そのためには、変化の激しい社会を生き抜くことができる資質・能力 (学び続ける力) の育成が必要

・これからの新しい教育の方向性 ~学びの改革~

※グローバル化と近代化により、多様化し、相互に繋がった世界を生き抜くために必要な能力で、単なる知識や技能だけではなく、態度などを含む様々な資質・能力を活用して、複雑な要求 (課題) に対応することができる実践的な力

知識ベースの学び (受動的)
—知識の習得重視—

「何を知っているか」を重視
【インプット】知識
→×(アウトプット)~できる



コンピテンシー (※) の育成をめざした主体的な学び
(能動的) —資質・能力 (知識・スキル・意欲・態度、
価値観・倫理観) の育成重視—

「知識を活用し、新たな価値を生み出せるか」を重視
【インプット】知識
→活用・協働→ (アウトプット)~できる

○福山市教育委員会 《福山100NEN教育7th year》

福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。

「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現する。

自校の実態に応じた 21世紀型“スキル&倫理観” による教育課程を編成し、子どもたちが主体的に学ぶ授業づくりを推進する。

※福山100NEN教育7年目

→ 理念と実践、抽象と具体を往還しながら、手段を目的化することなく、「質」を求め「実」を追求していく (「学びが面白い」と実感する「子ども主体の学び」づくりの深化)。

【広瀬学園校区で育成する21世紀型“スキル&倫理観”】

基礎的な知識・技能 → 基礎的・基本的な知識・技能を着実に獲得しながら、既存の知識・技能と関連付けたり、組み合わせたりしていくことにより、知識・技能を定着するとともに、新たな課題を発見し、多様な他者と協働したり、よりよい解決方法を選択したりすることで、目的に応じた解決策を導き出したり、実行したりすることができる。

課題発見・解決能力 → 物事を多面的に見たり、経験や知識を活用したりする中で、新たな課題を発見し、多様な他者と協働したり、よりよい解決方法を選択したりすることで、目的に応じた解決策を導き出したり、実行したりすることができる。

コミュニケーション力 → 多様な他者と協働することで、新たな考えを創造し、適切かつ効果的な解決策を導き出すことができる。

○広瀬学園校区のめざす子ども像

自己（自立）・・・夢や目標に向かって見通しをもち、粘り強く行動できる子ども

他者（共生）・・・友達の良さを認め、課題解決に向けて共に取り組む子ども

【小中合同で統一した取組】

- ・小中合同行事を効果的に仕組み、異年齢交流や大人数での活動を行い、児童生徒の「やればできる」「やってよかった」と感じる体験を積みませ、自己肯定感を高める。
- ・また、大学研究者を招請し児童生徒の実態に応じた授業研究など効果的な合同研修を実施する。

○広瀬学園教育目標

『心豊かで 主体的に学び たくましく生きる子どもの育成』

〈広瀬学園がめざす授業〉

- ☆ 「なぜ、どうして?」「教えて!」「わかった、できた!」「もっとやりたい!」などの声のする授業
- ☆ 一人一人が疑問に思うことを課題として設定し、解決への手だてや方法を選択したり、個々の理解度に合った学び方をデザインしたりして、自分の考えを深めていく姿を引き出す授業

参考資料

→ 新学習指導要領で育成する資質・能力:三つの柱のバランスの取れた実現

- (1)知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2)思考力, 判断力, 表現力等を育成すること
- (3)学びに向かう力, 人間性等を涵養すること。

→ 育成すべき資質・能力の三つの手立てとして

- (1)授業改善の視点を, 「主体的・対話的」で深い学びとする。
アクティブ・ラーニングの方法論だけでなく, ねらいは授業改善である。
- (2)個別最適な学びの実現
 - ①指導の個別化
支援が必要な生徒により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実践する。
特性や学習進度等に応じ, 指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行う。
 - ②学習の個性化
学習の基盤となる資質・能力等を土台として, 生徒の興味・関心等に応じ, 一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する。
- (3)協働的な学びの実現
 - ①集団の中で個が埋没してしまうことのないよう, 一人一人のよい点や可能性を生かすことで, 異なる考え方が組み合わせたり, よりよい学びを生み出す。
 - ②知・徳・体を一体的に育むため, 教師と生徒の関わり合いや, 生徒同士の関わり合いなど様々な場面でリアルな体験を通じた学びを行う。
 - ③異学年間の学びやICTの活用により空間的・時間的制約を超えた他の学校の生徒たち等との学び合いを行う。

Ⅲ 経営理念（ミッション、ビジョン）及び学校経営目標

一人一人の教職員の学校経営参画意識を高め学校力を強化するとともに、保護者・地域の学校への信頼度を高め協働体制を確立することにより、教育目標の実現をめざす。

1 地域社会における我が校の使命（ミッション）

へき地・小規模校として地域からの学校を大切に思う気持ちを受け止めるとともに、広く市民からの要望に応えられる広瀬学園中学校教育を推進する。

●昭和55年（1980年）7名在籍，教育後援会発足（空家バンク制度）

通学バス代金補助（町内会3割・後援会2割）

★少人数の中できめ細かい指導をしてほしい（学習個別指導・関わり・活躍の場）

★落ち着いた雰囲気の中で生活したい

(1) 生徒にとって、「学校へ来るのが楽しい，学びがいのある学校」

(2) 保護者にとって、「わが子を通わせてよかった，3年間の成長がわかる学校」

(3) 地域にとって、「地域の学校として，ともに活動・協力してよかったと思われる学校」

(4) 教職員にとって、「この学校に勤務してよかった，やりがいと自己成長が実感できる学校」

2 使命の追求を通じて実現しようとする我が校の将来像（ビジョン）

(1) めざす学校像

① 安心して学習や生活ができる学校

② 一人一人に活躍の場がある学校

③ 掃除や整理整頓が行き届いたきれいな学校

(2) めざす生徒像

① 自己（自立）・・夢や目標に向かって見通しをもち，粘り強く行動できる生徒

② 他者（共生）・・友達の良さを認め，課題解決に向けて共に取り組む生徒

(3) めざす教師像

① 教育公務員としての自覚と使命感を持って活動する教職員

② 自ら進んで研鑽し，力量を磨きあう教職員

③ 社会や子どもの変化に柔軟に対応できる教職員

※2022年度（令和4年度）特認校「広瀬学園」開校

1 施設一体型小中一貫校，通学区域は市内全域

2 受入生徒：不登校，大きな集団になじめない，児童養護施設ルンビニ園在園児童生徒等

3 校舎：現広瀬中校舎と増築校舎を使用，体育館，プールは旧広瀬小のものを使用

スケジュール：2021年度（令和3年度）改修・増築工事

4 定員：小学校各学年概ね10人 中学校各学年概ね15人 合計105人程度

5 教員：校長（1），教頭（2），教諭（17），養護教諭（1），事務職員（1）

小中学校とも，学年の在籍児童数にかかわらず，全て単式学級

6 その他：ICTの活用，地域との交流他

IV 学校教育目標を達成するための基本方針

※2022年度（令和4年度）学校評価自己評価表参照

1 確かな学力（知）

■ 自分の課題解決に向けて、主体的に学び、個々の学力を定着させる

【児童生徒に基礎的・基本的技能を活用させ、個々の学力を伸ばす】

個々の学習の目標を設定したり、個人やグループ等で学び合ったりしながら、自分に合った学習方法で取り組ませる。

- 自己の成長が実感できた生徒（肯定的評価）を80%以上にする
- 授業で考えることは面白い生徒（肯定的評価）を80%以上にする

【生徒どうしの学び合いのある場を設定する】

「わかった、できた」「もっとやりたい」等の声がするよう、協働して課題解決する活動を工夫する。

- 学び合いのある場を授業に取り入れていると回答する生徒（肯定的評価）を80%以上にする

(1) 児童生徒に基礎的・基本的技能を活用させ、個々の学力を伸ばす（各教科による学びの個別化）

「個に応じた指導（指導の個別化と学習の個性化）」を一層重視し、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」を推進する。（自分で立てたスケジュールに基づき学習を進める）（別紙参照）

① 指導の個別化

- ア 支援が必要な生徒により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実現する。
- イ 特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行う。

② 学習の個性化

学習の基盤となる資質・能力等を土台として、生徒の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する。

③大単元の設定〈小学校〉

大単元の設定を行い、資質・能力の育成＝思考力・判断力・表現力の育成を重点的に行い、児童の活用力を高める学習を展開する。思考・判断・表現の学習を通して、知識・技能を習得し、また、学びに向かう力の育成を目指す。

④児童自らたてる学習デザイン

自分に必要な学習や学習方法を選択、修正しながら学習を進める。教師は、指導方法や教材、学習時間などの柔軟な設定を行う。また、学習モデルの提示を行うことで、大単元やパフォーマンス課題などに合わせ、児童が学びのデザインを選択する。

(2) 生徒どうしの「学び合い」による授業改善

生徒どうしの「学び合い」を授業の中に根付かせ、主体的・対話的で深い学びの授業づくりを推進する。

① 〈重点〉「学び合い」の徹底

- ア 「小グループ活動」を位置づける
 - 周りの人に分からないところを教えてもらう。
 - 多様な考え方をすり合わせることによって、互いの差異を認める。（考えを一つにまとめる必要はない）
 - 教師は援助が必要な生徒に必要な援助する。
 - 生徒どうしのかかわりで、分かった生徒が分からない生徒をケアし、集団のレベルアップ

プに繋げる。

イ 授業の進める際の留意点

- 教師が一方的にしゃべらない。教師の発言：20%
- ゆったりしたテンポで、間を大事にする。
- 生徒の発言にすぐに反応しない。
- 一問一答式の発問をしない。
- 生徒との関わりを柔らかにし、じっくりと対話する。
- 生徒を怒って統制しない。大勢の前で一人を叱らない。(生徒の尊厳)

② 〈個の変容を追う〉

少人数の学校であり、個々の生徒の課題に応じた指導が必要である。したがって、教師の指導や生徒自身の学びによって、どう変容したのかの視点で指導の成果を検証する。

(3) 学ぶ価値のある課題提示の工夫

生徒が主体的に学びたいと思うためには、学ぶ価値のある課題にしなければならない。例えば、学習意欲を高める導入の工夫や学ぶことが何に役立つのかを明確にする。そのために単元全体や小中高の連続性等も含めた教材研究の徹底が必要となる。

教材・教具の選択と提示方法（ICTの活用、具体物・半具体物、教師のパフォーマンス等）。

(4) 学習課題を通して生徒どうしをつなぐ

学ぶ価値のある課題提示により学習課題と生徒をつなぎ、さらにはその学習課題を通して生徒どうしをつなぐ工夫が必要。一人ではできない課題を設定することで生徒どうしの協働的な学びを成立させる。ただ単にペアやグループにするのではなく、必要性のある協働的な学びとする。

- ・基本は学級づくり（居心地のよい学級）
- ・仲良しグループでない、課題解決のためのグループワークスキルの育成
- ・形にこだわらない（例：グループ人数や机の配置は課題解決のための最善の方法を考える）

※ 勉強ができる生徒が仕切るような活動にしない。全ての生徒が活躍できるよう工夫をする。

(5) 特別支援教育の視点を生かす授業づくり

- ① 生徒が見通しをもって課題に取り組めるよう、導入の工夫をする。【見通しをもたせ】
- ② 生徒が安心・集中して授業に臨めるよう、展開のパターンを工夫する。【いつも同じように】
- ③ 「ここまできたらほめられる」ものさしを提示する。【ここまできたら】
- ④ 4つの支援

【視覚的支援】「学習課題」提示・・・学習の見通しを持たせる「今日はこんな勉強をするんだ」「やってみたい」

※ 色を決めておく。黄色で書いて赤で囲む。

「ページ数」の板書・・・教科書・ワーク等のページを記入する

「カードやシート」の活用・・・頻繁に使うもの 復習・ヒント

「今日のポイント」提示・・・教師が生徒に確認する

※ 本時のねらいとの関係

【聴覚的支援】「指示は一文 後付け指示禁止」・・・繰り返さない、集中させること

「指示をする前の一瞬の間」・・・声の大きさを変える、集中させる

【体感的支援】いっしょにやる、解く、考える。

【意欲的支援】具体的に、その場で褒める。

(6) 生徒指導の3機能を生かす授業づくり

- ① 自己決定の場を与える。
- ② 自己存在感を与える。
- ③ 共感的な人間関係を育成する。

(7) 自己成長の実感による知識・技能の習得

- ① 生徒がわかる喜び・できる喜びを味わえるよう、繰り返し学習（ドリル学習・基礎基本ドリル）、補充学習（放課後・夏季休業中等）等指導の工夫をする。
- ② 生徒が自己の学習状況を理解し、自己成長感を実感できるよう、評価の工夫をする。
- ③ 家庭学習の充実を図る。
- ④ 「漢字検定」「英語検定」「数学検定」に全員が挑戦する。
- ⑤ 各種学力調査を活用した生徒の変容を分析
学力の伸び調査 → 全国学力・学習状況調査 を分析，改善策を策定

2 豊かな心（徳）

■ 広瀬タイムを通して、自己選択・決定をすることができる

【広瀬タイムで課題解決に向けて協働し、互いを認め合いながら学び、肯定的な評価ができる】

広瀬タイムでの課題をSDGsと関連付けてとらえ、課題発見・解決学習を進める。

→ 自分の考えは認められている生徒（肯定的評価）を80%以上にする

SDGs達成に貢献している生徒（肯定的評価）を80%以上にする

【小中合同の学校行事等を充実させる】

生徒会活動や行事において生徒たちに目標やその達成に向けた計画・活動を設定し、取り組ませる。

→ 運動会や文化祭等の行事、及び部活動において生徒満足度（肯定的評価）を90%以上にする

（1）広瀬タイム（ふるさと学習）の推進

- ① 地域に触れ、自己を見つめ直す「広瀬タイム」を計画・実施する。
- ② 課題発見・解決型の学習を仕組み、地域貢献を行う。（主体的な学びと発信）
- ③ 広瀬DASH!村プロジェクトの中で、自然と直接関わり合いながら豊かな心を育む。

（2）道徳教育の充実

「特別の教科 道徳」の時間を充実し、授業公開する。

- ① 道徳教材の読み込みを行い、内容項目、ねらいを確認し、導入・展開を工夫する。
- ② まとめの検討（落としどころ、オープンエンド等）
- ③ TTでの指導の工夫（役割分担、評価等） ← 学年内でチャレンジしてみる
- ④ 体験活動を関連づけた道徳教育の推進

（3）キャリア教育の推進

キャリア発達にかかわる諸能力を育成する。

－ 人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力 －

（4）情操教育

- ① 小学校全体で取り組んでいる広瀬太鼓
→ みんなで太鼓を叩き、音を合わせることによる楽しさや心地よさの体感
- ② リーデンローズによる音楽宅配便や、管弦楽団によるオーケストラ
→ 多様な音楽に触れ、音を感じるとともに表現を使って演奏者に返そうとする感謝の思い
- ③ 広瀬特戦隊による朝の登校指導
→ 笑顔で元気に学校に来ることができることによる幸福感、楽しさ

3 健やかな体（体）

■ 基礎体力を向上させる

【持久力を中心に体力を向上させる】

新体力テストを全校で実施する。

前年度の記録や県平均などを基に目標設定を行う。

→ 体力テストにおいて、自己ベスト率を80%以上にする

【部活動（ソフトテニス部・総合文化部）を充実させる】

部員どうしが相互に刺激し合い、高め合うように全教職員で指導する。

→ 部活動の生徒満足度（部活動が充実していると感じる）の肯定的評価を80%以上にする

（1）体づくりの推進

① 部活動（指導とかかわり・練習試合等計画）を充実させ、体力の向上を図る。

② 全職員で部活動指導にあたる。

③ 「新体力テスト」の弱点の補強を授業・部活動で行う。

※ 部活をしない生徒、バス通学の生徒の増加により、体力に課題のある生徒が増加する傾向がある。

体育などで意図的な体力向上の取組が必要である。

④ 児童会、生徒会による運動を取り入れた集会・遊びの企画

⑤ 「広瀬なわとびリンピック」や「5分間チャレンジ」の実施による体力向上の取組

（2）健康教育の実施

① 学校保健計画及び学校安全計画に関する指導計画を確実に実施する。

② 校内美化等の環境づくりを推進し、当たり前のレベルを高め、心の健康と安定感を維持する。

（3）食育の推進

① 食育全体計画及び年間指導計画に沿って組織的に推進する。

② 望ましい食習慣を確立するとともに、「食」に対する正しい理解と態度を育成する。

4 信頼される学校づくり

■ 地域・保護者から信頼される学校教育を推進する

【地域・保護者へ積極的に学校情報を発信する】

様々な機会を通して、地域・保護者との情報発信を積極的に行う。

→ 学校情報発信に対する保護者の満足度を85%以上にする

(1) 保護者との連携

- ① 日常的に家庭訪問・電話連絡を行い、保護者と教職員とが綿密な連携をとる。
- ② P T A活動，地域活動に教職員は積極的にかかわる。

(2) 安全確保と学校環境の整備

- ① 施設・設備の点検を実施するとともに、防犯に関する安全教育・安全管理を行う。
- ② 危機管理マニュアルの徹底を図る。

(3) 積極的な情報発信

- ① 学校要覧・学校だより・学年だより・保健だより等の配付とHPの充実を図る。

(4) 学校評価の充実

- ① 学校経営目標の達成に向け、全職員が協力して取り組む。

(5) 教育課程の編成，実施及び評価

- ① 特色ある教育課程を編成・実施し，学期ごとに評価・改善に努める。

(6) 新たな人事評価制度の効果的な活用

- ① 学校経営目標と個々の自己目標の連鎖を図り，学校教育目標の実現をめざす。
- ② 人事評価制度（自己申告による目標管理）を活用し，自らの職能成長を図る。

(7) 不祥事防止に向けた取組

- ① 不祥事防止委員会を定期的実施し，気になること等を交流し，不祥事の未然防止を図る。
- ② 不祥事防止に係る研修を行う。

5 力量ある教職員

■ 働き方改革の意義を理解し、自ら実践することができる

【業務内容を精選しながら質を高め、年間を通して計画的に業務を遂行する力を付ける】

定時退校日を厳守するとともに、見通しを持った業務管理を進める。

→ 時間外勤務時間、月45時間を超える教職員をゼロにする

本校での仕事に意義とやりがいを感じることができる

→ 教職員の肯定的評価を90%以上にする

コロナ時代の学びに挑戦して、「自立」と「共生」に向けた多様な学習活動を実践する。

→ 教職員の肯定的評価を90%以上にする

【小学校との合同研修及びブロック別研修による授業改善の推進】

小中合同授業研修（外部講師招請による研修2回、授業研究等）

ブロック別研修による全員1回の授業公開

※ ブロック研修の学びを学校での教育研究に結びつける。ブロック研修は主体的な学びのためのヒント。それを自校の生徒の課題改善にアレンジする。

「ブロック研修の学び」＋「広瀬中の学び合いの授業づくり」＝学力の向上

（1）教職員の資質の向上

- ① 教育公務員としての自覚と使命感を持つとともに、自己研鑽を積む。
- ② 計画的で継続的な校内研修・校外研修（市教研・県教研・先進校視察）を実施し、研修内容を報告し還元する。

（2）小学校との合同研修及びブロック別研修による授業改善の推進

- ① 大学教授を講師に招請し、小中合同で授業研究を実施
- ② ブロック別研修による教科指導力の向上

（3）生徒指導の充実

- ① 全ての教職員が指導方針・指導計画等について共通認識を持つ。
- ② いじめ・不登校等に対して危機管理意識を持ち、早期発見、早期対応、早期解決を図る。

（4）教育相談体制の充実

- ① 定期的に生徒の悩みや不安を把握し、教育相談を行う。
（学期毎に、「体罰」「セクシャル・ハラスメント」「いじめ」の生徒アンケートを行う）
- ② 教職員は生徒や保護者に対してカウンセリングマインドを持って接する。

（5）働き方改革の意義の理解、自ら実践

- ① 7時間45分を意識し、心身ともに健康な働き方をする。
- ② 仕事に意義とやりがいを感じて取り組む。
- ③ 一人一人の学びを促進するために、個に応じた多様な学びを実践する。